

宗教間対話と平和的共存に対するユダヤ教の貢献

J.マゴネット(前ロンドン・レオ・ベック大学長)

公開講演会「文明の変革期における宗教の役割」

主催:東京国際大学国際交流研究所

場所:東京国際大学早稲田キャンパス・マルチホール

2015年5月30日

ユダヤ人とユダヤ教について

日本におけるユダヤ教とユダヤ教徒を話題にするとき、私はいつも決まったジレンマに陥ってしまう。私が目にした統計によれば、日本に在住するユダヤ教徒は2,000人ほどである(総人口比0.0016%)。おそらくこの数値は、東京と神戸にある小さなユダヤ教徒コミュニティから導き出されたものだろう。この数値が少なすぎるとしても、大抵の日本人が一生に一度もユダヤ教徒と遭遇することなどない、とはならないだろう。ヨーロッパやアメリカでは、ユダヤ教徒は数の上では小さくてもその存在は極めて重要であり、長く複雑な歴史もある。そのため、ユダヤ教の信仰や文化の一部は一般にも広く知られている。

しかし日本での状況はまったく異なっている。ユダヤ人やユダヤ教に関するなんらかの話題を日本の聴衆に提供しようとするとき、どこまで背景を説明すればいいのか私はいつも悩んでしまう。ユダヤ教、キリスト教、そしてイスラームの三つの一神教の宗教間対話に言及する場合などは特にそうだ。たとえば三宗教それぞれの信者数からも、興味深い問題が提起される。おおよそではあるが、世界のキリスト教信徒は22億人おり、世界の総人口比30%強である。イスラームの信徒は16億人で、総人口比25%弱である。対照的に、世界中でユダヤ教徒は1,400万人、総人口比0.2%である。そのため信者数だけで考えれば、ユダヤ教は他の二大宗教と同じ部類には当てはまらない。それでもこの三つの宗教は、いわゆる「一神教」として扱われ、「アブラハムの宗教」とも見なされる。宗教間対話の話題に入る前に、ユダヤ教徒の社会の特徴についてももう少し説明を続けたい。

ユダヤ教徒の起源はヘブライ語聖書[旧約聖書]に見出すことができる。これは、2000年から3000年ほど前のある人々の精選された記憶や文明を記録した書物集である。神の性質や要求を革新的に理解することで、神を理解して神とともに生きる方法を見出そうとする1000年間の苦闘がそこには表わされている。この神とは、世界を創造した唯一者であり、世界における全能者であると理解されており、目で見ることでもできず、いかなる方法でも身体的な特徴をもって表現されることはない。しかしこの神は、この人々の先祖であるアブラハムと、究極的にはイスラエルの民として知られるその子孫たちと特別な関係を結ぶに至った。イスラエルの民とは、神とともに苦闘する人々、

あるいは神のために、神に代わって苦闘する人々という意味をもっていた。聖書中の重要な文言の一つによると、この関係の出発点として、アブラハムは世界の「正義と公平」という価値観に賛同するよう子孫たちを教化するという[創世記 18:19¹]。この関係は、神によって彼らに約束された地において、その後彼らが築く社会によっても示される。彼らを通じて、世界のすべての家族は「恩恵」、つまり豊かさや物質的繁栄や安寧を含む聖書的な言葉を見出すという。アブラハムの子孫がエジプトにおける隷属から救出されたことで神の約束は実証された。それゆえに、聖書の教義体系に隷属からの解放という概念が記された。シナイ山における神とイスラエルの民との相互義務という契約の形をとって、この関係は正式なものとなった。そして彼らがカナンの地へ入って定住したことで確かなものとなった。

続いて聖書では、新しい社会を生み出そうとする顛末が描写されている。内部集団での成功や失敗や愚行を通じたさまざまな問題、近隣の民族や、エジプトとその南部のアビシニア(エチオピア)、バビロンや北部の後継国といった同時代の大国との困難な関係などである。この話題における重要な要素として、国家形成の成功、わずかではあるが独自の小帝国を築き上げたこと、その後の二つの王国(イスラエル王国とユダ王国)への分裂、その両王国が征服されて指導者層と住民の大半が国外追放となったことなどがある。そして「ユダヤ人」の名称の起源となる南部のユダ王国は、バビロン捕囚を経て、その地位が回復されて、首都をエルサレムに置いた。それから 500 年を経て、ローマ帝国時代に再び追放を受け、ユダヤ教徒ディアスポラとして知られる状況が生み出されたことで、ユダヤ人コミュニティは世界中に散らばっていった。彼らはかつての祖国の宗教的アイデンティティを象徴するすべて、エルサレムの神殿とその司祭職、故郷とその王族を失ってしまった。その後、学問的エリートであるラビの手によるラビ・ユダヤ教が誕生し、これがコミュニティの信仰となって、広範に拡散したなかで独自のアイデンティティを維持しようとした。その後ユダヤ人は、キリスト教とイスラームの下で生きることになる。両者とも多くの異なる点をもちながらも、ユダヤ教を継承する後継宗教であると自認していた。そのため孤立して生活していても、抑圧された少数派コミュニティとして生きることが多かったのだが、いずれにせよ追放と依存の体験から生じた相反したりするスピリチュアルな挑戦に、ユダヤ人は対応しなければならなかった。多数派の社会や文化との間に、ある種の知的でスピリチュアルな関係が共生的に維持されることもあった。「住む土地の法が法となる *dina d'malkhuta dina*」というユダヤ教の戒律の原則ゆえに、ホスト社会の法がユダヤ教の究極の価値観を侵害しない限り、ユダヤ教徒コミュニティは周辺社会と協調し、現実にも貢献することもできた。

¹ [訳注]「わたしは彼をえらんで彼の子らと彼の後の家族がヤハウエの途を守り、義と公平を行うように彼に命じさせようとしている。それはヤハウエがアブラハムに約束されたことを彼の上に成就させるためである」(『旧約聖書 創世記』関根正雄訳、岩波書店、1967年、p.48)

こうした歴史の必然として、ユダヤ教からはいかなる布教活動も排除され、新参者に対しては著しい警戒心が生み付けられた。しかしユダヤ教の教えの当然の帰結として、神を求めるためにユダヤ教徒になる必要はなかった。七つの基本となる社会的法、おおむね十戒に由来する「ノアの子孫の法」を遵守しさえすれば、いかなる個人や社会であれ神に受け容れられた²。殺人、偶像崇拜、姦通などを含む六つの禁止事項とともに、第七番目には行うべき要求がなされている。これは、神が第一にアブラハムを選んだ遺産となる、正義と公平の法を促進するために必要な制度を社会が生み出すことを保証するものであった。

ヨーロッパの啓蒙期と解放³によって、こうしたユダヤ教徒の存立モデルは劇的に変化した。新たに誕生した国民国家において、ユダヤ人は初めて自立した市民となった。それまで彼らの集団は、閉鎖的で自己完結的なコミュニティだったが、それは彼らの生活していた社会から強制されたためでもあった。集団の内部は、ユダヤ法の遵守という共有意識と、ラビの権威と一般信徒の指導者によって維持・管理されていた。こうした閉鎖的な世界が終わりを告げ、国民国家における個々のユダヤ教徒市民からなる世界に変わった。そこでは、ユダヤ教とユダヤ教徒コミュニティとの関係は、個々人が選択するものとなった。数多くの運動や潮流が現れては、公式にユダヤ教徒としての帰属先の選択肢を提供しようとしたが、帰属意識の問題は個々人に委ねられた。ユダヤ教の伝統の解釈やそれとの関係に基づいて、リベラル派や改革派から保守派まで、宗派集団は正統派ユダヤ教のなかでも多様化した。しかしディアスポラ期のユダヤ教徒の不安定な体験を憂い、19世紀のナショナリズムという時代的な風潮から、聖書に記された故郷に帰還することで2000年間の放浪に決着をつけようとするユダヤ人もいた。宗教的・世俗的、社会主義的・現実主義的など多様な形態があるが、シオニズムはユダヤ教徒の脆弱な立場に恒久的な解決をもたらそうとした。最終的にシオニズム運動はイスラエル国家の建設という成功を収めたが、それはユダヤ教徒のあらゆる痕跡を消し去ろうとしたナチスの野望に世界が驚愕したための成功でしかなかった。

宗教的なものであれイデオロギー的なものであれ、こうした趨勢は解放や近代社会に対するユダヤ教的な反応のごく一部でしかない。解放期以降の主要なユダヤ教の運動は、可能であれば各地のホスト社会への同化を目指したものであるという議論もあるくらいだ。ユダヤ教徒の立場を「平常化」したいという願いは、過去と決別したいという個々人の私的な願望でもあるが、多くの者に共有されてもいたし、また伝統的なユダヤ教の宗教的要素の影響も受けていた。例えば、ユダヤ人で

² [訳注]ノアの七つの戒めとも言われる。1.偶像崇拜の禁止、2.殺人の禁止、3.盗難の禁止、4.性的不品行の禁止、5.冒瀆の禁止、6.生きている動物の肉を食べるの禁止、7.法的手段提供のための裁判所の維持。

³ [訳注]フランス革命による **nationalism** (ここでは国民主義と訳される) で、これまでのユダヤ人差別が公式に否定されることになった点から、ここでは「解放 Emancipation」と呼んでいる。

あると意識する個人は無数に存在し、ヨーロッパの知的・イデオロギー的潮流に一定の影響を受けながらも、主導的な役割を担うこともあった。こうした動きは、彼ら自身が後退とみなすものに対して、あるいは親世代のユダヤ教の制約などに対しての意識的な反発であると理解されていた。それでも、その潮流のある側面は、かつての宗教的価値のシステムを「世俗化」させたものとみることのできる。それゆえに、聖書中の預言者たちの教えやラビの法として目にするのできる社会的正義への要求は、社会主義者や共産主義者の運動でも、特にロシア革命とソビエト連邦の誕生へと連なる歴史的過程でもみられた⁴。ラビ・ユダヤ教にとって中心となる宗教的価値は、伝統的文献のなかにあった。それを精査しようとユダヤ教徒が献身してきたことは、芸術、科学、その他専門的知識を要する研究職における学術的な達成へと姿を変えた。中世キリスト教社会は、ユダヤ人に商業や国際取引に従事するよう強要したが、他国につながる家族ネットワークやその他の紐帯によって、そして商業活動の基準をさだめた同じユダヤ教の法体系を共有していた事実によっても、彼らの商業活動は促進された。こうした経験によってユダヤ教徒は、[フランス革命後の]新しい社会状況でも主要な企業・商業活動を行うようになった。

各国のユダヤ人が地域の世俗的な文化に適応するようになると、かつては複雑に絡み合っていた民族性、宗教的信条や慣習が断片化してしまった。別な表現をすれば、今日のユダヤ人は、特定の集団に属しているという感覚によって形成される忠誠心、アイデンティティや忠義心の複合的でしばしば錯綜的なネットワークのなかにありつつも、自ら育ち生活してきた地域の文化にも同化している。同時に彼らは、宗教的な伝統とは曖昧な関係しかもっていないという考えにも影響を受けており、本質的に文化として宗教儀式に関与しているか、あるいは家族的な関与でしかないともみなされている。おそらく、今日のユダヤ人の7割は、自らを基本的には「世俗的」あるいは「ヒューマニスト的」な個人であると考えている。2000年もの間ユダヤ人を悩ませてきた疑問は、ときには追放という困難にも直面した彼らの集団の神との関係の性質だった。しかし、今日のユダヤ人にとって最大の疑問は、個々人の「アイデンティティ」問題におかれている⁵。このアイデンティティ問題は、シオアShoaやホロコーストHolocaustと呼ばれる、1933年から1945年にかけてのナチスによる総信者数の半分近いほどのユダヤ教徒虐殺からも、重要視されるようになった。世俗的であれ宗教的であれ、文化的であれエスニック的であれ、あるいはナショナリズム的な表現であれ、ユダヤ教徒の

⁴ Yuri Slezkine, *The Jewish Century*, Princeton and Oxford: Princeton University Press, 2004 に詳細な検討がある。

⁵ ユダヤ教の性質に関する伝統的分類は、「神・トーラー・イスラエルの民」の三要素間の相互関係として表現される。たとえば聖書時代には神の理解に、中世では、啓示の内容を解釈し適用しようとするラビ的な関心とともに、トーラーに最大の関心がおかれていたが、現代はイスラエルの民、つまりユダヤ教徒性(ユダヤ教徒としての意識)に対してより大きな関心が払われている。

存続を確保するための挑発的な解決策が、一部のユダヤ人によって推進されることとなった。しかしユダヤ教徒が最も不安視しているのは、ユダヤ教徒虐殺がさらに深刻な代償をもたらしていることである。永遠に繰り返されるかのごとく、反ユダヤ主義は今日でも再発している。一部のユダヤ人の中には、ユダヤ教徒であることは危険を伴う贅沢であり、できれば外部の世界と同化して安逸な曖昧さへと逃れた方がよい、といった感覚的な理解がある。

この序文で私が示したい点は、「ユダヤ教」と「ユダヤ教徒」に言及する際には、私たちは多種多様な民族や、宗教的にも世俗的にも多様な制度について言及しなければならず、一般化が容易ではないということである。さらには、ラビであっても、あるいは[今日の]イスラエル国の首相であっても、ユダヤ教やユダヤ教徒を公式に代弁できる中心的な権威などはない。実際、ユダヤ人は自分たちの見解が多様であることを誇りにしている。その必然的な結果として重要なことは、「ユダヤ人」の信仰や彼らの振る舞いを一般化したとして、それが正しいときもあるだろう。しかし、私たちが苦しんできたステレオタイプのような、正しくないものにもなることもある。ここから、ユダヤ人として私たちは、「ムスリム」とか「キリスト教徒」を話題にする際にも、それぞれの信者個々人の特性を軽視した一般化には慎重でなければならない。これこそが、対話の実践と経験から絶えず学んできた教訓の一つでもある。

1,400万人のユダヤ人のなかで、600万人がイスラエル国内で生活しており、500万人がアメリカ合衆国に、150万人は東西ヨーロッパで生活している。その他は英連邦やアジア、アフリカ、南米各国で生活している。イスラエル市民のユダヤ教徒と、[それ以外の]ディアスポラのユダヤ教徒との間には、アイデンティティについて顕著な違いがみられる。イスラエル市民の場合、彼らのアイデンティティや文化は、宗教的要素やその他の要素がさまざまに作用する国籍と一致している。ディアスポラのユダヤ教徒コミュニティは、彼らが属してきたさまざまな国々の一員としての体験をもっており、それぞれの国を「故郷」と感じられるかどうかは、地域の彼らに対する態度次第である。長期にわたってディアスポラ・コミュニティが存続できたことについては、常に疑問が投げかけられてきた。反ユダヤ主義によってユダヤ人は他へ移住したのだろうか、非ユダヤ人との通婚で次世代はユダヤ教徒意識を喪失した、などの理由からである。『消えゆくディアスポラ』という書籍は、高齢化やコミュニティの縮小といった人口統計上の証拠や、宗教生活の伝統的形式から全般的に離反していることなどを根拠に、ヨーロッパのユダヤ教徒社会の消滅を予測している⁶。それでも看過できない

⁶ Bernard Wasserstein, *Vanishing Diaspora: The Jews in Europe since 1945*, Harvard: Harvard University Press, 1996.

一種の回復傾向も認めることができる。より高い移動性を促して、[各地の]ユダヤ教徒コミュニティを潜在的に強化すると考えられるヨーロッパの開放政策も影響してくるだろう⁷。

[各地の]ディアスポラのユダヤ教徒コミュニティは、[それぞれが属している]社会の他の宗教コミュニティに対して、基本的に類似した役割を果たしている。教育、福祉、良好な隣人関係、そして[ユダヤ教徒コミュニティ]内部の統制と外部との関係における民主的価値観を追求することで、ヨーロッパ市民社会の一部をなす不可欠のコミュニティとなっている。こうした草の根レベルでのシナゴグ、教会、モスクそれぞれの相互の関係によって、有意義な宗教間対話が行われているが、多くの場合それらは意識されていない。

イスラエルとディアスポラのユダヤ教徒それぞれを私は別個に扱ったが、それでも両者は家族的紐帯を通じて結束しており、宗教や政治に関する異なった展望によっては、複雑でときに矛盾を含むような方法でも結束している。初期シオニストのイデオロギーでは、ユダヤ教徒の国民国家創設によってすべてのユダヤ人が移住し、ディアスポラは「消滅する」と想定されていた。実際にはそうならなかったために、少なくともイスラエル国内の政治レベルでは、イスラエルを支持する者たちにとってディアスポラは[解決されるべき]問題としてそれほど意識されていなかったが、それでもディアスポラのユダヤ教徒は将来的な移民の対象であり、財政・政治的支援を取り付けるための重要な資源であるとみなされるようになった。その反対に、ディアスポラのユダヤ教徒たちの間では、イスラエルは尊厳の源であり、ユダヤ教徒アイデンティティにとっての一定の要因でもあった。しかし、ある国におけるユダヤ教徒コミュニティに対する態度が決定されるに当たって、イスラエルは重要ではあるが幾分か問題を含む要因でもあった。当初の数十年間、イスラエル国家は中東で達成された民主主義のモデルだとヨーロッパやアメリカ社会によって見なされていたために、イスラエルは安易にかつ公然と支持された。しかしパレスチナ占領の衝撃、パレスチナ人の悲劇的運命に対する認識の拡大、そしてイスラエルとアメリカの癒着は、特にヨーロッパでのイスラエルの立場を失墜させた。「反シオニズム」と「反ユダヤ主義」を同列に扱うことができる場合もあるが、ユダヤ人はイスラエルの行為に対する正当な批判を真摯に受け止めなければならない。そうしなければ、レバノン南部での戦闘や近年のガザ紛争など、主要な社会が容認できない事件によって、周到なテロによる殺害も含め、ヨーロッパ諸国におけるユダヤ人やユダヤ教徒の資産に対する反ユダヤ的攻撃の増大へとつながるだろう。ディアスポラの[イスラエルに住んでいない]ユダヤ人は、イスラエルの行為によってしばしば当惑させられている。しかし、イスラエル国家に居住していない[ので戦闘に加わらない]という恩恵を享受しているために、長期にわたって現実に行進している紛争の「最前線」に

⁷ 現代ヨーロッパにおけるユダヤ人について、以下の文献は重要である。Diana Pinto, “Are There Jewish Answers to Europe’s Questions?”, *European Judaism*, Vol. 39, No 2, Autumn 2006, pp. 47-57.

いる者たちの決断にあれこれ口を挟む権利などない、という非難を受けて沈黙させられるときもある。イスラエルの行為にユダヤ教徒が抗議の声を上げても、イスラエルに対する連帯を示すべきであると暗黙的に感じるユダヤ教徒コミュニティからの怒りに直面することもある。もしも、ユダヤ人がイスラエル支持を表明すれば、ムスリムもパレスチナ人に対する連帯感を感じても当たり前であろう。そうなる必然的に、中東紛争は外部から切り離された、[イスラエルとパレスチナという]地域限定の紛争となってしまう。ディアスポラ[という体験]とは、共にマイノリティとして居住するユダヤ人と[パレスチナ人]ムスリムの宗教間対話で橋渡しができる特別な機会を提供している。

今日のこうした対話について、以下で紹介していきたい。

宗教間対話の拡大

1昨年、三つの一神教間で行われてきたヨーロッパ宗教間イニシアティブ[1972年設立]が40周年を迎えた。私自身、個人的に発足からこのプロジェクトにかかわってきた。「ヨーロッパ・ユダヤ教徒・キリスト教徒・ムスリム(JCM)」の常設会議という名で、1週間にわたる長い国際学生会議が開催された。三宗教の将来の指導者となるべく研修中の学生を招いて集中的に研究や議論を交わし、共同礼拝やインフォーマルな会合なども行っている。これについては何度も日本で紹介してきたので、ここで詳細を繰り返さない。私は40周年を祝う席で、初期に直面した困難や不安について披露した⁸。当初、対話は各宗教を代表する数人だけで行われることが多く、主流派からは一種のマージナルな存在とみなされることが多かった。それでもこれらの人々は、地理的な距離が縮小し、それまで相互に隔絶していた宗教コミュニティが「グローバル・ビレッジ」で隣人となりつつあった時代において、他宗教との対話は不可欠な作業であるというビジョンをもっていた。一連の会議を始めるに当たっては、まずパートナーを見つけることが困難だった。ヨーロッパ諸国では、三宗教それぞれの信者数の比率はまったく異なっていたからである。さらにムスリムの場合、ヨーロッパに新たにやってきた者たちとして自らのポジションを模索し、直面したまったく異なる社会状況に同化しようと苦闘していたためである。個人的な接触を通じて参加できる人物を探したが、自ら参加したいという意志とともに、自らの宗教を公的・公式な形で代表するなどとは考えない人物であることを重視した。お互いの精神世界を知らなかったことによる誤解もあった。ある宗教コミュニティの人物と会合することで、同じ宗教に属する他のコミュニティを遠ざけてしまい、そこからの参加を妨げたりしなかっただろうか。「対話」とは策略であって、実際には布教が目的ではないかという疑念を払拭できただろうか。どれだけ長く、信頼関係に基づいた緊密な世界を会議は維持できるだろうか。これは、今日の問題

⁸ Jonathan Magonet, “Dialogue and Beyond”, *European Judaism*, Vol. 48, No. 2, Autumn 2015 (印刷中)を参照。

に関する公式な声明を作成しようとする圧力に抵抗するということだった。今日でも、こうした構想を始めるに際しては、おそらく同じ問題が生じることだろう。しかし、特にこの 20 年間ほどで、9・11〔訳注:2011 年 9 月 11 日の米国同時多発テロ〕の挑戦に対する対応として、宗教間対話に関する組織、出版物、プログラム、そして学問的な研究などが増大する現象がみられている。

世界的レベルの諸宗教会合という試みの端緒は、1893 年にシカゴで開催された「万国宗教会議」にまで遡ることができる。その後、英国のヤングズバンド (Sir Francis Edward Younghusband, 1863-1942 年) のビジョンによって 1936 年には「世界信仰会議 (WCF)」が創立された。「平和のための宗教」は 1961 年に創立され、わずか一握りの世界の主要な宗教の高位指導者が集まり、宗教のサミットを組織できないか模索を始めた。世界中の諸宗教の信者たちが、世界平和の実現に向けた緊急行動を取らなければならないと、これらの指導者たちは痛感していた。この「平和のための宗教」の世界会議、「世界宗教者平和会議」は、1970 年に初めて京都で開催された。

1990 年代には、キュンク博士 (Hans Küng, 1928 年-、カトリック神学者、チュービンゲン大学名誉教授) がさまざまな活動間の対話を促す神学的基盤を形作り、これによって彼は「地球倫理財団」を創立することになった。その後有名となった以下の言葉で、キュンク博士はその任務を定義した。

宗教間の平和なくして、国家間の平和なし

宗教間の対話なくして、宗教間の平和なし

諸宗教の基礎を学ばずして、宗教間の対話なし

1990 年代の初めには、アメリカのスウィング主教 (William Edwin Swing, 1936 年-、米国聖公会) が「宗教連合イニシアティブ (URI)」を創立し、宗教間対話の促進と活動のため、いまや 80 カ国以上の国々で数十万人もの会員を誇っている。

1995 年、「キリスト教徒・ユダヤ教徒国際会議 (ICCJ)」が恒例の総会で、ユダヤ教徒・キリスト教徒・ムスリムの三者委員会による「アブラハム・フォーラム (IAF)」の創設を決議した。彼らのプログラムにムスリムを加えるという決定は、特にヨーロッパ諸国におけるムスリムの増加と、西側世界におけるイスラームのインパクトの増大を受けたものだった。彼らの活動が拡大したことは、対話、寛容、敬意が本質的に必要であるとともに、恐怖と偏見に打ち勝つための積極的な働きかけの必要性が会議にとって意識されたことの表れだった。ムスリム側の構想として最初期の一つに、ハサン・ビン・タラール王子 (1947 年-) の後援を受けて、1994 年にアンマンで設立された「王立宗教間対話研究所 (RIIFS)」があり、光栄なことに私は 1997 年にここで講演を行うことができた。

いまでは、宗教間対話は国連を通じて、政治的な舞台にもその活動を広げている。2008 年 11 月、潘基文事務総長は、宗教間対話に関する国連ハイレベル会合を開いた。事務総長は、「伝統的に、平和には異なる国家間の利害を調整することが含まれる。しかし、平和を維持するためには、

より積極的な均衡策も必要であることを私たちは学んできた。平和を持続させるためには、個人や集団、そして国家も相互に尊重しあい、お互いを理解しなければならない。宗教間対話の構想は、今後ますます頻発するこうした必要性を訴えかけている」と述べている。さらに、「このためには、政府官僚、草の根活動グループ、企業経営者、慈善家、そしてアカデミズムやメディアといった全ての人々を取り込まなければならない」とも付け加えている。

実際に宗教間対話が実施されてきたこの40年間、三つの「アブラハム」の宗教の関係を扱う研究プログラムも開始された。ユダヤ・キリスト教徒間の対話は長い歴史があるものの、ユダヤ教徒とムスリムの関係は比較的新しい取り組みであり、近年注目に値する展開がみられる。特にその一つが、ユダヤ教徒の発案によって発展しつつある。1990年代、ケスラー教授(Edward Kessler, 1963年-)によって、ケンブリッジ大学にユダヤ・キリスト教徒関係学センターが創立された。これに続いて2006年には、ムスリム・ユダヤ教徒関係学センターが設立されたが、これはヨーロッパで最初の試みだった。両センターはともにウルフ研究所の傘下にある。教育と研究分野における重要な役割とともに、同研究所が取り組んできた共同作業のなかで重要な功績として、「公開書簡:平和と対話、ムスリムとユダヤ教徒の相互理解への呼びかけ」の出版が挙げられる。世界中のムスリムの権威との協議の上で執筆されており、ムスリムの展望に基づいたこうした試みにおける初の文献である⁹。

2010年から2014年にかけてのアメリカでは、三つの研究機関(ユダヤ教神学校、ハートフォード神学校、北米イスラーム学会)によって学問的ワークショップやコミュニティ基盤の予備的計画が共同で実施された。その結果は、学術誌『ムスリム・ワールド』の特集号「アメリカにおけるユダヤ教とイスラーム」として刊行され、「共有する源泉」という行動指針も刊行されている¹⁰。後者は、対話をどのように実施すべきかささまざまな指針が含まれている。多年にわたるヨーロッパ・ユダヤ教徒・キリスト教徒・ムスリム(JCM)の会議と同じ原則をこの書籍で目にしたとき、私はこの上ない誇りを感じた。[JCM会議の原則]は以下の通りである。

⁹ ウルフ研究所ウェブサイト(www.woolf.cam.ac.uk/uploads/open%20Letter9620text.pdf)で閲覧可能。Interreligious Consultations (IJCIC)に対する International Jewish Committee の返答は、Seek Peace and Pursue It: A Jewish Call to Muslim-Jewish Dialogue というタイトルで、Belief Net のウェブサイト(<http://www.beliefnet.com/Faiths/Judaism/2008/03/Seek-Peace-And-Pursue-It-A-Jewish-Call-To-Muslim-Jewish-Dialogue.aspx?p=1>)で閲覧可能。

¹⁰ 『共有する源泉』について、以下のサイトを参照。

<http://learn.jtsa.edu/content/commentary/5775/sharing-well-resource-guide-jewish-muslim-engagement>

議論ではなく対話を実施するために、私たちは以下のことを実行する。

- 耳にしたことを考える観点に耳を傾けるのではなく、理解したいと思う観点に耳を傾ける。
- 疑って低く評価するため弱点に耳を傾けるのではなく、賛同して学ぶため長所に耳を傾ける
- 他人の立場や動機の仮定を前提に話すのではなく、自らの理解と体験に基づいて、自らのために話をする
- 揚げ足取りや混同させるために質問をするのではなく、理解を促すために質問する
- 話題を遮ったり変えたりするのではなく、他人が会話を完結できるようにする
- 声を張り上げて圧倒するのではなく、できるだけ簡潔に話し、無言であまり話をしない聴衆を会話に誘い込む
- 次の話題ばかりに集中せず、他人の言葉や感情に集中する
- 他人の経験を曲解だとか不適當と批判するのではなく、彼らにとっては現実であり妥当性があることを認める
- 他人を操作し、その感情の正当性を否定するために感情的表現をするのではなく、(自分自身や他人にとっても)理解やカタルシスを得られる本当の感情を表現する
- 有利になろうと沈黙を用いるのではなく、沈黙に対して敬意を表する

シュライブマン (Joyce Schreibman) 『始める前に *Before Beginning*』による指針
ハートフォード神学校のアブラハムの関係構築プログラムで、ランダウ (Yehezkel Landau)
とスミス (Karen Nell Smith) が用いた『議論ではなく対話 *Dialogue Rather than Debate*』による指針

アメリカにおける別な活動の発端として、2008年に設立されたムスリム・ユダヤ教徒交流センターがある。これはユダヤ教徒のイスラーム学者であるファイヤーストーン教授 (Reuven Firestone、ヘブライ・ユニオン大学) などを含む、多くの同僚研究者たちの交友関係から発展したものである。これはヘブライ・ユニオン大学 (HUC) のユダヤ宗教研究所、オマル・イブン・アルハッターブ財団、南カリフォルニア大学文芸科学部の宗教と市民文化センターらの後援を受けた活動でもある。両宗教に基づいた展望を描写したファイヤーストーンとファトヒー・オスマン両博士の論文は、ウェブサイト上に公開されている。アブラハム、女性、人権、宗教的な聖戦、シャリーアなども研究テーマに含まれている。さらには、両宗教が共有する伝統や価値といった遺産に関する情報も示されている。これらの情報は、お互いを知りたいという関心を持つムスリムとユダヤ教徒のため、より確実な前進となるレファレンスの提供が目的とされている。このセンターは YouTube にチャンネルを開設し、両博

士のインタビューや発言などを収録した動画も提供されている。背教、宗教間融和、イスラームとユダヤ教の歴史的関係、中世史といった話題の動画もある。

2009年にはユダヤ教古典文献と教義の研究者として知られるニューズナー教授 (Jacob Neusner, 1932年-) が、神学に関する三宗教会議の展開を提唱し、いくつかの共通性や指摘されるべき相違点を示そうとしている。ニューズナー教授は以下のように述べている。

三宗教ともに、神は唯一者であると認めている。それゆえに三者は同じ神を崇拝している。三者ともに、神は美德に報い、罪を罰し、すべての人類の命運を握っていると同意している。三者ともに、神は人類に預言者を使わし、啓示の書であるトーラー、聖書、クルアーンは宗教的な中心であると信じている。それゆえ、三者は同じ構造を作り上げる要素を共有しており、そして現実に共通の道徳性をも有している。

第二に、三者は経典に含まれる共通した物語という共有遺産をもっている。三者はお互いを知らないよそ者同士ではない。物語の共通演目を維持しているが、その演目の一覧は異なっている。イスラームはキリスト教とユダヤ教の物語を要約しており、キリスト教はユダヤ教の物語を要約している。

これは、一神教間の第三の最も重要な関係と直接的に結びついている。キリスト教はユダヤ教とのつながりを認め、イスラームはキリスト教とユダヤ教との連続性を認めている。モーゼはユダヤ教だけでなく、キリスト教でもイスラームでも預言者とみなされ、アブラハムと[妻]サラは、キリスト教とユダヤ教では父母と称される¹¹。

さらに続けてニューズナー教授は、実りある相互の意見交換が極めて重要となる五つの領域を提示する。三宗教のうちで、二つの宗教では根本的に立場が異なるが、残り第三の宗教はその中間を示していることがその理由である。この五つの領域とは、一神論、神の民、聖なる生活、信者と異教徒や不信仰者との関係、そして終末の日といった古典的な神学概念である。彼自身はユダヤ教的展望からの言及であることも認めながら、各領域において、三宗教それぞれに固有であるとニューズナー教授が考える点を示している。

¹¹ Jacob Neusner, “Time for Islam: From Dialogue to Trialogue in Interfaith Relations”, *Journal of Interreligious Studies* のウェブサイトで閲覧可能 (<http://irdialogue.org/articles/time-for-islam-from-dialogue-to-trialogue-in-interfaith-relations-by-jacob-neusner/>)。

ニューズナー教授は、研究すべきテーマについて価値ある詳細な分析を行っている。それは、ユダヤ教とその他の二宗教との関係について考察すべき別な手法としては、お互いが異なった特徴を共有している点を確認することである。イスラームに関しては、「スペインにおける黄金期」という、ユダヤ教徒とムスリムの過去における関係を過度に美化しなくても、両宗教の数世紀にわたる相互作用の産物として相当数の信条や価値観が共有されている。その中には、法、啓示の書、解釈と注釈の平行する伝統、ときにはヘブライ語とアラビア語に共有されるスピリチュアルな語彙などに由来し、表現される信条がある。しかしユダヤ人はキリスト教徒とともに、啓蒙主義後の進んだ宗教として、多くのことを分かち合っている。歴史的な[聖書文献の]批判学、私たちの考えではより個人主義的傾向、少なくともヘブライ語聖書の共有、そしてナザレのイエスとユダヤ人イエスという結合や分離される人物像などである。このような理想的な世界においては、ユダヤ人は、断固として互いが衝突する途を譲ろうとしないかにみえる、これら二つの偉大な精神的義兄弟(つまりキリスト教とユダヤ教)を仲介する重要な役割を担うことができた。しかし、悲劇的にも、中東における紛争によって、こうしたユダヤ教徒の役割は不可能となった。

部屋の中の象

こうした三者協議やその他のユダヤ教徒・ムスリム間の対面で語られることのないテーマとして、「リビングのなかにいる象」がある[訳注:誰もが気づいているが見て見ぬふりをしたい現実を喩えた表現]。これは議論を避けて通れない、イスラエル・パレスチナ紛争のことである。一般的なパレスチナ人とイスラエル人は、平和を強く希求していることに間違いはないが、それが把握されにくいことから、今日の悲劇が続いている。紛争の発端は複合的であり、互いが過去から現在に至る現実を非難しあうような体験は双方が有している。自らの存在を脅かすものに対してユダヤ教徒がどう反応するか、シヨアやホロコーストというユダヤ人の体験は計り知れない要因となっているのは明らかである。アラブのレトリック、そして増大するムスリム世界は、こうした恐怖の緩和になすすべもない。一方で、イスラエル政府の一連の政策は、外的な脅威によって決定づけられているが、同時に内部での闘争や野望はさまざまなレベルで批判の対象ともなっている。政治的に対立しているにもかかわらず、アラブ、パレスチナ人、そしてムスリムとの対話を促進しようとする私的な声やプログラムが無数にあり、占領地での兵役拒否など政府の一定の活動に抵抗する組織もあることは、まさしくイスラエルという国の持つ底力の一部を示している。望んでいることはただ平和であるが、そのためにどれだけの代償や危険が冒されているのだろうか。

宗教間対話は、さまざまな方法で成り立ちうるものである。たとえそれが、政治のレベルにたいした影響を与えないとしても。最近の研究として、アブー・ニメル「イスラエル・パレスチナにおける宗

教間対話:真の貢献か、単なるガス抜きか」というものがある¹²。著者は、アメリカン・ユニバーシティ(ワシントン)の国際問題学部で国際平和と紛争解決を専門とする准教授である。この地域における宗教間対話を蝕む傾向にあるいくつかの問題について、以下のような見解を示している。

イスラエル・パレスチナ紛争の文脈では、過去や現在の暴力に火を注ぎ、永続化させている三宗教それぞれの集団によって、宗教が利用されている(宗教的象徴や儀礼、そして聖地、などが紛争の原動力として恒常的に持ち込まれている)。そのため、政治的暴力の連鎖における操作に対応するため、人々の宗教アイデンティティを平和と多元主義の源泉となるよう建設的に働きかけることが肝要である。エジプト、ヨルダン、レバノン、イスラエル、そしてパレスチナという中東の五つの社会における宗教間対話を分析する研究を終えて、多くの市民社会と一部の政府は、宗教間対話は各社会を橋渡しできる建設的役割を担えると理解していることが分かった。しかし、この地域においてイスラエルとパレスチナとの宗教間対話の働きかけはほとんどみられない。そうした集まりへの参加にパレスチナ人が警戒を示す理由としては、占領を常態化させてしまう危険性、オスロ合意の失敗によるフラストレーション、ユダヤ教とイスラエルの組織がこうした動向を手引きしていること、会合の大半は占領と迫害という政治的現実を目を向けようとしなないなどがある。

宗教間対話が否定される上述のような批判や理由にもかかわらず、例外的にいくつかの対話は、ムスリム、キリスト教徒、そしてユダヤ教徒が平穏な環境でそれぞれの信仰を議論する機会を提供している。その結果は、否定的なステレオタイプの打破に貢献している。他の宗教集団についてもっと知ること(儀式や儀礼、基本的な教義)、そして最も重要な点として「敵」を人間として理解することなどである。憎悪の渦巻く自爆テロという現実や、40年にわたる占領と屈辱によって、相手のイメージは非人間化され、(社会的そして公的に、さらには個人的にも)双方の人々が向き合える余地はなかった。こうした状況の下での宗教間対話は希少な窓口となり、アラブとユダヤ人がお互いを人間として認め合い、互いの信仰について無知であったことにどう対処すべきかを学ぶことができる¹³。

イスラエル・パレスチナ紛争の文脈において、平和を維持しようとする構想があったこと想起するのは意義がある。イスラエルにおける宗教間対話は、哲学者ブーバー(Martin Buber, 1878-1965

¹² [訳注] Mohammed Abu-Nimer (Associate Professor, International Peace and Conflict Resolution, School of International Service, American University), Interfaith Dialogue in Israel-Palestine: Real Contribution or Venting Mechanism?

¹³ Common Ground News Service, Jan 26, 2006 (www.commongroundnews.org).

年)などの平和活動家のグループによって、1950年代に存在していた。知的専門職や学校関係者などによる多くの対話集団を傘下に収める組織として、たとえば「宗教間対面協会(IEA)」がある。組織の目標として、「宗教間対話と異文化研究を通じて、中東における平和の促進に邁進する。宗教とは、問題の原因となるのではなく、この地域の内外に存在する紛争を解決する原因となることができ、またそうならなければならないと私たちは信じている」と述べられている¹⁴。その貢献によって、IEAは平和的文化に貢献し、平和的文化に向けた全世界的な動きを促進する組織であると、UNESCOによって認められている。

イスラエルが従事する絶え間ない戦争の異例の産物の一つとして、「ペアレンツサークル・ファミリーフォーラム(PCFF)」がある。600以上のパレスチナとイスラエルの家族からなる共同組織で、長期化する紛争によって近親を失った家族たちである。ウェブサイトによると、以下のように述べられている。

PCFFの最も広範囲な活動としては、「対話集会」プログラムがある。集まった一人ひとり、個人的な体験談やパレスチナ人とイスラエル人の一対一の和解のメッセージを聞くことができる。これらのメッセージによって、参加者が暴力の代わりに対話を進んで受け容れる意欲を高め、「相手側」の必要としていることや考えに対する理解を深めることを目的としている。このプログラムの主要な目的の一つとして、第二次インティファダ以降激減してしまったパレスチナ人とイスラエル人の対面の場を設けることである。多くの参加者にとって、対話集会は相手側のメンバーと出会う初めての場となっている¹⁵。

その他のプログラムに「ナレーティブ・プロジェクト」があり、似たような訓練を受けたイスラエル人とパレスチナ人のグループを定期的に面会させて、相互理解と敬意を構築しようとしている。公開討論を実施するための和解センターを設立し、パレスチナとイスラエルの遺児のために恒例のサマー・キャンプも実施している。Facebookグループ「壁のなかの亀裂 Crack in the Wall」で、イスラエル人とパレスチナ人の接触を増やすツールとしてソーシャル・メディアも用いられている。

こうした活動のなかで最近のものに、「女性による平和の遂行 Women Wage Peace」がある。2014年夏のガザ攻撃から生まれ、ウェブサイトでは以下のような目的が示されている¹⁶。

¹⁴ 事務局長 Dr. Yehuda Stolov、ウェブサイトは、www.interfaith-encounter.org。

¹⁵ ウェブサイトは、www.theparentscircle.com。

¹⁶ ウェブサイトは、womenwagepeace.org.il。

「女性による平和の遂行」は、非政治的で広範な支持層を持ち、公衆と政治の領域へ影響を行使しようと数千人の女性たちが活動する、急速に発展中の運動である。希望を取り戻し、私たち自身と子どもたちと将来の世代の平和な存立に向けて活動する。新たな戦闘を回避し、イスラエル・パレスチナ双方から尊敬され同意されるような、暴力に頼らない紛争の解決を4年以内に達成することを目指している。

こうした組織の数は無数にあるだろう。ユダヤ教の宗教的観点から、イスラエル・パレスチナの和解に向けて働きかけを行う別な例として、「人権のためのラビRabbis for Human Rights」がある¹⁷。ウェブサイトで以下のような使命が述べられている。

1988年に設立された「人権のためのラビ」は、公然と人権[擁護]に専念するイスラエルでただ一つのラビたちの声である。ユダヤ教諸会派からなる100名以上のラビとラビを目指す学生たちを代表して、私たちの[活動の]権限はユダヤ教の伝統と普遍的な人権宣言を根拠としている。私たちの使命はイスラエルの人々に人権侵害を知らしめ、こうした不正を是正するよう国家組織に圧力をかけることである。ユダヤ教の伝統をナショナリズム的かつ孤立主義的に理解した声が叫ばれることが多いが、ユダヤ教の伝統に従えば、よそ者や異人、弱者、改宗者、未亡人や孤児などの安全と福祉に対して責任を負うべきことを「人権のためのラビ」は訴えている。

平和に関するユダヤ教の教え

ユダヤ教とは、平和に最大の関心をもつ宗教であると主張をすることは簡単である。慣例的に「平和」と訳されるシャローム *shalom* という言葉が、ヘブライ語聖書で頻繁にみられることに目を向けさえすれば、こうした主張は裏付けられる。この単語は[合計で]200回以上頻出し、ヘブライ語聖書の三分区[訳注:律法の手(トラー)、預言の手、諸手]のどれにおいても見出すことができる。[律法の手に属する]『民数記』の「祭司による祝福」では最高潮を示す言葉、「主が御顔をあなたに向け、あなたに平安を与えられますように」があり、これが毎日の典礼文の一部となっている[第6章第26節]。[諸手に属する]『詩編』では、エルサレムに関するやりとりである、「エルサレムのために平安を祈れ *sha'alu sh'lom yerushalayim*」(第122編第6節)が思い起こされる。聖書の表現に由来して、「あなたに平安あれ *shalom aleichem*」というように日常の挨拶としても用いられる。週のうちでもっとも神聖なシャバット[金曜日の日没から土曜日の日没まで、ユダヤ教の安息日]は、

¹⁷ ウェブサイトは、rhr.org.il。

世界的平和をもたらすメシアの到来の前兆という意図をもつ安息日であるが、この日に、ユダヤ教徒は互いに「平安なるシャバトを *Shabbat Shalom*」と挨拶を交わし、この表現は大衆的な典礼歌の基礎ともなっている。「人生と有徳に満足する」個人の重要な特質として、『詩編』(第 34 編第 15 章)は、「平安を求めて、これに勉めよ」と私たちに誘っている。これに基づいて、「自分自身に平安を求めつつ、さらなる平安を求めよ」とラビの伝統では解釈される。ヘブライ語聖書に示された神の戒めのすべては、日々の生活でそれに直面した際に遵守されるべきものだが、平安[という戒律]だけは積極的に探求しなければならないとも言及している(*Numbers Rabbah Hukat 19:27. Avot d'Rabbi Natan, 12:26a* も参照)。

ラビの格言には、世界を存続させる三つの柱の一つは平和である、というものがある(『ミシュナ: アヴォート』1:18)。この平和の柱は、残り二つの柱である「真実」と「正義」と複合的な関係をなしており、「真実」と「正義」だけが叫ばれても、「平和」の余地がなければ紛争は避けられない。あらゆる集団に、自らの絶対的な要求にさえも妥協ができる能力があるかどうか、この「平和」の成功がかかっている。このような平和への要求は、ユダヤ教の典礼で多用される、「最高の平安をつくりだす者が、私たち(現代の典礼では、「全人類に」という場合もある)にその平安をもたらしてくれますように」という文言に関連する私たちの実践のなかに、要約されている。この文言を唱和することで、私たちは三つの段階を経て自らを振り返る。まず平安を求めて釈明を行い、次にその望みに一定の配慮をして、最後に合意が可能となる余地を設けるのだ。

ユダヤ教はおおよそ 2000 年もの間の大半で、異なる文化や宗教的伝統のなかで、いかなる具体的な権力も政治的な力ももたずに、各地で生き残ってきた少数派の信仰として存在してきた。政治的な歴史的結末として、帝國的な権力や野望といった課題や責務に対処しなければならなかった、キリスト教やイスラームの圧倒的な多数派としての文化とは好対照である。搾取と追放に苦しみ、究極的には根絶やしにされるかもしれないという危険を伴ったものの、ユダヤ教徒コミュニティに権力が不在だったことで、他に対して権力を行使したり、法を制定したりして、それを強制するといった現実に直面することなく、平和に価値を見出して平和を説き勧める一種の精神的な自由さがユダヤ人にもたらされた。反面、敵に囲まれた少数派の精神的な価値を支えることができた神学は、ユダヤ教を途方もない課題に太刀打ちできない状態にしている。「歴史に再び姿を現したユダヤ教徒」であるイスラエル国家の誕生によって、神学的、道義的、そして政治的な問題が生じている。これこそが、今日のユダヤ人によって全世界に突きつけられている課題であって、ユダヤ人自身も危機に瀕していると認識しているものだ。

宗教間対話は、私たちが直面している世界に新たな次元の方策を提供し、アブラハムの子孫たちすべてにとってよりよい未来の希望を提供する。数年前に私が作成した祈願文で、本報告を締めくくりたい。これは、私自身が所属する英国のユダヤ教改革運動の典礼でも用いられている。ど

こであれその他の宗教間対話で用いてきた、昔日の宗教間の障壁が次第に崩れ去っていくことを思い起こさせてくれるものである。

あらゆる被造物の神よ、人類の調和という理念を命じられて、私たちは恐れてあなたの面前に立つ。私たちはたくさんの伝統をもつ末裔である。共通する叡智や痛ましい誤解を受け継ぐ者である。誇り高い希望をもち、慎ましい成功を望む者である。いまこそ共に集うときである。記憶と真実、勇気と信頼、愛と約束において。

私たちが共有していることのなかに、私たちに違いがあったとしても、ヒューマニティの祈りを学ぼう。人間の自由に驚こう。私たちの統一と相違のうちに、神が唯一であることを知ろう。

勇気が私たちの信念と調和しますように。誠実さが私たちの望みと調和しますように。

あなたに対する信頼によって、私たちは互いにもっと親しくなれますように。

私たちが、過去と現在と対面することで、将来が祝福されますように。

アーメン¹⁸。

¹⁸ *Seder Ha-tefillot, Forms of Prayer, 1: Daily, Sabbath and Occasional Prayers*, 8th Edition, London: Movement for Reform Judaism, 2008, p. 249.